

森のちやれんがニュース

2022 春

Newsletter vol.27



総合展示室2階 第3テーマ入口 《北海道鳥瞰図》の高精細写真に注目！

総合展示室2階、第3テーマの入口には、《北海道鳥瞰図》という大きな絵があります。昭和11（1936）年、吉田初三郎という絵師が、約80日間にわたる北海道内スケッチ旅行をもとにして描きました。

総合展示室では、この作品をいつでもご覧いただけるよう、以前から実物のかわりに写真を展示してきました。昨年秋に、よりきめ細やかな写真に取り替えたことにより、実物本来の細かな描写が、これまで以上にはっきりと読み取れるようになりました。

《北海道鳥瞰図》の前には、広いスペースが設けられています。離れて絵の全体を見渡すと、鮮やかな色彩で表

現された北海道を一望でき、近づく、道内各地の名所や市街地などを読み取ることができます。

《北海道鳥瞰図》から、昭和11年当時の北海道を巡ってみませんか。

（学芸員 田中祐未）



《北海道鳥瞰図》一部抜粋



CONTENTS

- ② 収蔵資料紹介
日露戦争の戦地からのたより
- ③ 総合展示資料・第4テーマ紹介
コンクリートブロック造の三角屋根住宅
- ④ 研究活動紹介
図書室のバックヤードから
- はっけん広場 冬の活動報告
ただいま「渦中」のはっけん広場！
- ⑥ 第19回 企画テーマ展
「アンモナイトと生きる
—50年の歩みとこれから—」
- アイヌ民族文化研究センターだより
- ⑦ 第10回アイヌ文化巡回展
「アイヌ語地名を歩く～山田秀三の地名研究～ 2022 幕別」を開催しました
- ⑧ 活動ダイアリー
2021年12月～2022年2月の記録

収蔵資料紹介

日露戦争の戦地からのたより

山田 伸一

研究部歴史研究グループ 学芸主査

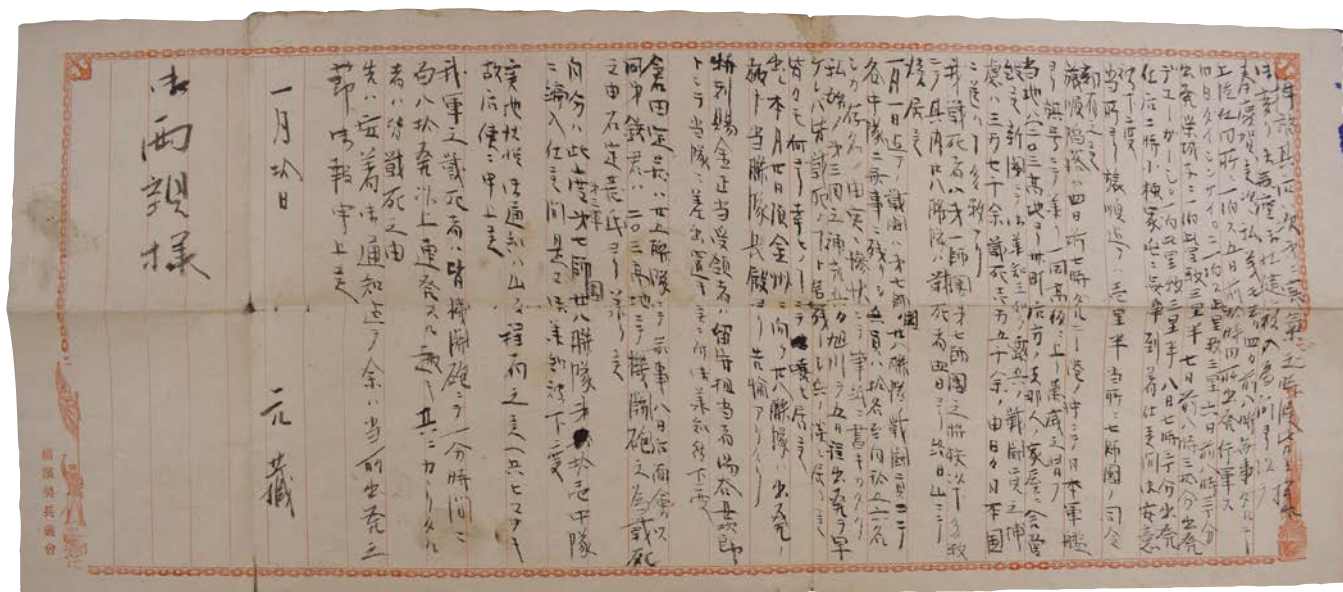


写真1 1905（明治38）年1月10日付の手紙（収蔵番号15304）

葉書ではなく、横浜兵義会という団体が作製した軍事郵便のための用紙に記す。折って封をすると封書大になる。

激しい戦闘のなか多くの兵士が死傷した日露戦争（1904～05年）。札幌郡の野幌屯田兵村（現在の江別市野幌）から出征した湯谷元蔵が父親に宛てた2通の軍事郵便は、戦地の様子や出征兵士の思いを伝えます。

一通目は1905（明治38）年1月10日付（収蔵番号15304）。4日午前に「ダルニー」（大連）に上陸し、8日に旅順から1里半の小柳家屯に無事着いたことをまず知らせます。大激戦地だった旅順のロシア軍が降伏したのは1月1日。旅順陥落をダルニー港の沖で知らされ、船上の一同、万歳を唱えた、と記します。

戦闘の様子は上陸後に聞いたのでしよう。二〇三高地の戦闘で自分が属する第7師団第28連隊も存命者わずかという惨状だったことを記したのに続き、自分たち第三回の補充兵の旭川発が5日ほど早ければみんな戦死していたらうなどと話し、何より幸いのことと喜んでいる、と正直に記します。

1分間に180発も発射する機関砲のために多くが戦死したのだ、とあるのも、この戦闘の残酷な実態を一兵士がどう

受け止めたかの記録として貴重でしょう。

もう一通、3月10日付の手紙は、自身も戦闘をくぐり抜けた後のものです（収蔵番号15305）。

2月27日から戦闘に参加、3月9日に奉天総攻撃を始め、10日午前陥落、とあります。「自分ハ弾丸ノ中ヲ無事ニクバリ出テ神之御守ヲ以テ負傷等モ致サズ実ニ仕合能キコトト思居候」と、自分の無事を神が守ってくれたおかげ、と記す心情は、どれだけ死傷者がいたかを読めば無理からぬと思えます。連隊長は行方不明、大隊長は負傷、小隊長は戦死、下士以下は20名余戦死、80名余負傷、残るは70名余だけ。15名いた自分の分隊でも3名しか残らなかった、というのですから。

いったん文面を締めくくってから、追伸として同じ野幌兵村出身者についての情報を、一人一人の名前を挙げて書き足しています。3名戦死、1名負傷、無事は自分以外に2名だけという厳しさです。

これらの手紙を読むと、1930・40年代の軍事郵便と比べて、書きぶりが率直

だな、とも感じます。所属部隊の移動経路や今後の予定、戦闘に遭遇せずに済んだ幸運への喜び、などは、日中戦争やアジア太平洋戦争の頃には書くのがはばかられたのではないかと思います。検閲の有無の違いでしょうか。

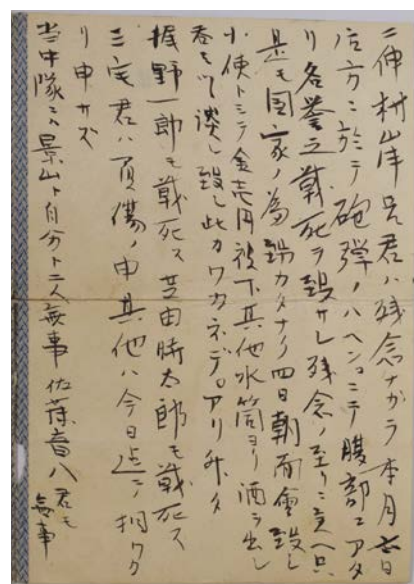


写真2 同年3月10日付の手紙の追伸部分（収蔵番号15305）

6日に戦死した「村岸兄君」とはその2日前に会って、小遣いをもらい、水筒の酒を飲んで語り合ったのが「ワカネデアリ升タ」（別れておりました）。

総合展示資料・第4テーマ紹介

コンクリートブロック造の三角屋根住宅

鈴木 明世

研究部博物館研究グループ 研究職員

「冬でも、家の中では半袖で過ごすことがある。」といった“あるある”を語られるほど、北海道の住まいは冬でも快適な温度を保つことができます。しかし、それはあくまで現在の話。北海道の住まいは、冬の寒さとの戦いの中で発展してきました。



明治期に本州以南から北海道への移住が本格化した頃、夏を涼しくすることを求めた伝統的な日本の住宅では、北海道の厳しい寒さの中でくらすしていくことは非常に困難でした。そこで、開拓使は積極的に欧米の建築技術を取り入れ、寒さに耐える住まいをつくることを目指しました。そうした取り組みの成果が、開拓使の廃止以降、大正期にかけて徐々に庶民の住宅へも広まっていきました。北海道開拓の村には、ちょうどその時代の建物が移築復原されています。これらの建物に多く見られる、板を少しずつ重ねた外壁(下見板張り)や、ガラス窓、ストーブなどの特徴は、そのような影響によるものです(写真1)。

その後も北海道の住まいの発展に向けた研究開発が少しずつ進みますが、大きな転機となったのは、第二次



写真1 開拓使による官舎
(北海道開拓の村 旧開拓使爾志通洋造家)



写真2 砂と小石とセメントを混ぜてつくった
コンクリートブロック



写真3 三角屋根が建ち並ぶ風景 (札幌市、昭和40年代)

世界大戦後すぐのことでした。昭和22(1947)年、北海道知事となった田中敏文は、北海道の気候に適應するための「寒地住宅」の開発を重点課題に挙げ、行政が主導して住宅の改良を進め始めたのです。そこでは、防寒性能の向上による快適な空間の創出とともに、耐火性能や戦後の資材不足における森林資源の保全などを考慮し、木材に依存した住宅からの脱却を目指しました。その中で、「コンクリートブロック」(写真2)を主構造とした住宅が採用され開発が進み、昭和20年代後半に「三角屋根住宅」と呼ばれる住まいがつくられました。昭和3～40年代には、三角屋根住宅が建ち並ぶ風景が各地で見られるようになりました(写真3)。

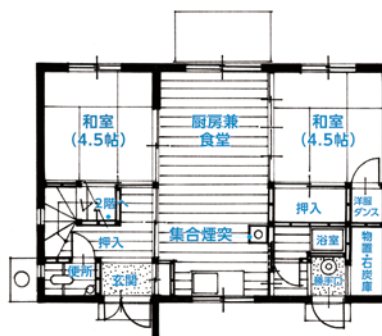


さて、三角屋根住宅における防寒性能は実に合理的に考えられています。まず、コンクリートブロックを積み重

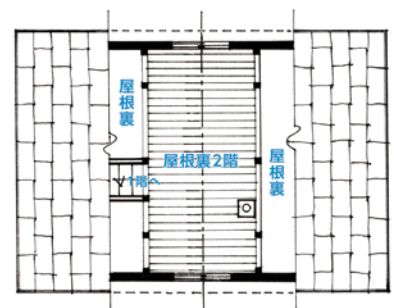
ねることで、隙間が生じないようにし、凸凹の無い外壁によって表面積を小さくすることができるため、外壁から熱が逃げていくことをできるだけ防いでいます。また、内部の間取り(図)は、廊下を少なくコンパクトにすることで、中央に置かれたストーブが住宅の内部全体を暖めやすくしています。さらに、できるだけ外壁の表面積を小さくし、かつ部屋を増やすために、屋根裏を二階として利用します。そこで、三角屋根住宅の名のと通りの急勾配な屋根によって、屋根裏の二階を広くしつつ屋根への積雪も起きないようにしています。まさに北海道の気候風土に合わせた住まいができあがったのです。



北海道における住まいの発展は、ここで終わりではなく、田中知事時代の昭和30(1955)年に設立された北海道立寒地建築研究所(現在：北海道立総合研究機構建築研究本部)の並みならぬ研究のもと進められ、現在の北海道の暖かい住まいにたどり着きました。



1階平面図 (面積約44m²)



2階平面図 (面積約15m²)

図 三角屋根住宅の間取り (昭和32年札幌市短期分譲住宅新築工事平面図 (財団法人北海道住宅公社, 1957) を基に作成)

研究活動紹介

図書室のバックヤードから

櫻井 万里子

研究部博物館研究グループ 主査



1974年北海道美唄市生まれ、札幌市育ち。北海道職員として福祉分野の業務に従事したのち、2009年より北海道開拓記念館（現：北海道博物館）の図書室に勤務。写真はバックヤード作業中に撮影。

博物館図書室の研究とは？

当館には総合展示室の地下に、面積80㎡ほどの、お客さま10人で満席となる小さな図書室があります。

図書館（図書室）は、館の性質により大学図書館、学校図書館、公共図書館、国立国会図書館、専門図書館の5つに分かれ、当館のような博物館の図書室は、企業や研究機関の資料室、議会図書室、病院図書室などと同じ専門図書館に分類されています。

専門図書館以外の図書館は、法律や要項などで設置が義務づけられていたり、運営や活動のあり方が規定されています。しかし専門図書館は組織の目的に基づき設置され、組織内での役割も館によって様々であるがゆえに、一律の規定は存在しません。

当館の図書室は、職員が調査研究やお客さまからのレファレンス（調べ物相談）に必要な図書を収集保管し、また保管した図書や、当館の調査研究の成果をお客さまに提供することを目的として設置されました。私はこの目的を果たすため、図書の整理やお客さま対応などの実務にあたりながら、職員とお客さまが求める情報を的確に提供できる収集整理と情報発信のあり方を研究しています。

誰もが情報を探しやすい図書室を目指して

図書室には約15万冊の蔵書がありますが（1枚もののリーフレットなどの薄い図書も多く、見かけよりも実際の数は相当多くなります）、直接お客さまがご覧いただける場所にある図書は1,000冊ほどで、蔵書の大半は2か所あるバックヤード（書庫）に収められています。したがって必要な図書を速やかに提供するには、蔵書の情報をパソコン上で検索できるOPAC（オンライン利用者目録）の整備が欠かせません。現在登録数は約3万1,000冊となり、

館内でお客さまに検索していただくための準備を急いでいます。

特に苦心するのが、博物館や研究機関との寄贈や交換で収集した図書の登録です。博物館や研究機関が刊行する図書は、非売品や入手方法が直接購入のみのものが多いため稀少性が高く、図書室のなかで最も特徴的かつボリュームの多い蔵書群です。図書室では、一般の図書は日本の図書館で広く使われている「日本十進分類法」を使い、図書の主題を表す分類番号を付して番号順に棚に収めますが、博物館や研究機関の図書は、都道府県ごとに館（機関）名のあいうえお順で収めています。この方法は探す図書が初めから決まっている場合や、館（機関）に関する予備知識がある場合は、探す範囲を絞り込むことができ便利です。

しかしお客さまからの質問は「冷蔵庫や洗濯機、携帯電話など身近な道具の移り変わりが知りたい」のように特定のテーマを調べる内容であることが多く、主題別に収められていない蔵書群から目的の図書を探すには時間がかります。このため過去のお客さま



図書室のバックヤード（書庫）

対応の記録を分析しつつ、質問の多いテーマをブックリストにまとめる、テーマに関連する語句がタイトルに含まれていない図書にはデータ登録時にキーワードも併記し検索されやすくするなど、必要とする図書を速やかに提供する方法を日々模索しています。

博物館の図書室にできること

専門図書館は、全国的にみても予算や人員、スペースなどの面で課題を抱える館が多く、当館のように専任の職員が司書1名の図書館も少なくありません。しかしそのなかでも多くの館が組織の持つ専門性や、特色のある蔵書を活かしたサービスを提供しています。当館の図書室も、当館だからできる情報提供のあり方を追求すること



博物館や研究機関の図書は館ごとに収められています

が、図書室が設置された目的を果たす近道だと考えています。

例えば当館には27名の学芸員や研究職員がおり、図書室に専門性の高い質問が寄せられたときは、これらの職員の協力を得ながら対応にあたることが

できます。また当館の研究成果をまとめた出版物はもちろん、収蔵資料の画像や収蔵資料のデータベースから得られる情報など、図書だけに留まらない情報源を用いて対応に当たることができるのが図書室の強みです。特に、当館のアイヌ民族文化研究センターが整理を進めている山田秀三文庫、久保寺逸彦文庫、職員採録の音声・映像資料は、図書室で閲覧・視聴できる件数を段階的に増やし、アイヌ文化を学ぶ多くの方々に活用されています。

これら当館ならではの情報を提供できる態勢をより整備し、北海道の自然・歴史・文化を知る入口となるような図書室を目指していきたいと考えています。多くの皆さまのご利用をお待ちしています。



図書室で閲覧できるアイヌ民族文化研究センターが整理した文書資料（山田秀三文庫）

【図書室利用案内】



開室時間／開館日の9:30～16:30

(5～10月は17:00まで)

電話／011-898-0466(総合案内)

●総合展示室を閲覧のお客さまは、自由にご利用いただけます。(図書室のみご利用のお客さまは、総合案内で利用の手続きをお願いします。)

●貸出・コピーサービスは行っていないのでご了承ください。

はっけん広場 冬の活動報告

ただいま「渦中」のはっけん広場！

これまでにもたびたび、このコーナーで紹介してきた「はっけんイベント」。現在、閉室中の「はっけん広場」で企画していた「作り物体験」です。この企画と指導は、解説員が行っています。インターネットなどでも、いろいろな工作動画が配信されていますが、「はっけんイベント」は只ではありませんが、タダの作り物体験ではありません。

イベントの企画にあたっては、北海道に何かしら（歴史、産業、自然等々）関連のあるもの、子どもを対象にしているのを、簡単に短時間に完成できることを基本に考えています。物を作ることで、それが糸口となって北海道の歴史や文化、自然に興味を持ってもらえるようにと、担当する解説員はグーッと、無い知恵を絞りました。

のおります（写真1）。また、素材は、北海道でとれた産直品！、刈りたてのワラや北海道産の羊毛など、普段触れることのない素材を使用しています（写真2）。

「おうちミュージアム」では、一部の作り方を見ることはできますが、博物館に来ると材料も、道具も揃っています。作り方は、解説員が手取り、足取り、熱血指導（時には、横からキ



写真1 はっけんイベントの作品



写真2
北海道産の羊毛

ツイダメだし！？）で安心して完成できます。残念なことは、現在「はっけん広場」は閉室中で、イベントは休止しています。しかし、コロナウイルスのまん延が落ち着き、開室すると楽しいイベントが体験できるよう準備万端でお待ちしております。

この記事を書いていた時は、「コロナ第6波」や「トンガの津波」などの大波続き。グリグリ渦の真っ只中、今後の予定は神のみぞ知る…。皆様のご健康を願っております。

第19回企画テーマ展・北海道化石会発足50周年記念展

「アンモナイトと生きる—50年の歩みとこれから—」開催中

令和4(2022)年5月22日(日)まで！

園谷 昂史

研究部自然研究グループ 学芸員

北海道化石会は、化石を愛好する人たちの交流をはかることなどを目的として活動する団体です。本会と北海道博物館（前身の一つである“北海道開拓記念館”を含む）は、「アンモナイトをはじめとする化石の魅力をたくさんの方々に伝えたい」という志を持ち、半世紀以上もの間、協力し合いながら、展示会や教育普及事業を展開してきました。

これまでのアンモナイトの展示会は、どの地層から見つかるのか、どのような生き物なのかといった、地質学や古生物学的な視点でとらえた内容で構成することがほとんどでした。

しかし、この展示会は「アンモナイトと生きる人」をテーマに、会員それぞれの自慢・思い出のアンモナイトを個人ごとに展示しています（写真1）。



写真1 会員の自慢・思い出の化石を紹介するコーナー

化石採集を始めるきっかけとなった化石、自分で採った最後の化石、保存状態が良く形の美しい化石など、特別な化石を約150点ご覧いただけます（写真2）。また、北海道とアンモナイトの歴史、今回が初めてとなる会員が化石に興味をもったきっかけ、クリーニングや保管方法の秘話などをあわせて紹介しています（詳細はQRコードある



写真2 多種多様なアンモナイトを展示

いは当館ウェブサイト参照）。

この展示を通して、アンモナイトをはじめとする化石や北海道化石会に興味を持っていただけたら幸いです。



■当館ウェブサイトの
アンモナイト展ページ

アイヌ民族文化研究センターだより

■第10回アイヌ文化巡回展

「アイヌ語地名を歩く ～山田秀三の地名研究～ 2022 幕別」を開催しました

当館が毎年道内各地で開催している「アイヌ文化巡回展」。

今年度の巡回展のうち第10回は幕別町での開催を企画し、当初は昨年(2021年)4月29日から5月17日まで、忠類ナウマン象記念館にて、続いて5月21日から6月20日までは幕別町千住の幕別町百年記念ホールにて開催する予定でした。ところが、新型コロナウイルス感染拡大のいわゆる第5波のため、忠類の会場は会期終了まで開催できたものの、千住での開催をいったん取りやめざるを得なくなりました。

しかしその後、幕別町教育委員会のご厚意とご尽力により、今年2月2日から3月7日までの会期に日程を延期し、幕別町千住での開催が実現しました。

◇

展示では、山田秀三氏の地名調査資料のなかから、1970(昭和45)年に十勝川筋のいくつもの川を調査したときの記録を中心に、幕別町とその周辺の地域に関する資料を紹介しました。

また展示会にあわせた講座も実施し、2月7日(月)には山田秀三氏地名研究と地名調査資料の特徴を紹介する講座を、2月21日には十勝の郷土史家・沼田武男が筆録したアイヌ語ノートの整理・翻刻事業について、特に幕別町札内の資料を中心に紹介する講座を、そ



写真1 展示会場のようす

して3月4日には、幕別の吉田菊太郎氏がみずから設立を企図した資料保存・展示施設である「蝦夷文化考古館」について、その設立の意義などを考える講座を、それぞれ開催しました。

◇

会期中には7,204名のお客様にご来場いただきました。また巡回展の予告から開催後の様子まで、幕別町の公式ツイッターや、幕別町地域おこし協力隊のツイッターなどでも紹介していただき、今回も地元の皆様に支えていただきながらの開催となりました。

末尾になりましたが、今年度の巡回の開催に当たり、様々なご協力・ご支援をいただいた皆様にお礼申し上げます。

【開催記録】

アイヌ文化巡回展

会期 2022年2月2日(水)～
3月7日(月)(開会 30日)
会場 幕別町百年記念ホール
ギャラリー

関連行事

○アイヌ文化講座

「山田秀三氏によるアイヌ語地名調査資料について」

2月7日(月)19:00～20:00

講師：小川正人

○アイヌ文化講座

「札内で採録されたアイヌ語資料の紹介―沼田武男「採訪帖」―アイヌ語十勝方言テキスト集―」から―

2月21日(月)10:00～11:30

講師：吉川佳見

○講演

「みずから資料館をつくる―吉田菊太郎と幕別町蝦夷文化考古館」

3月4日(金)10:00～11:00

講師：小川正人

(アイヌ民族文化研究センター長

小川 正人)



写真2 山田秀三が地名調査の記録を書き込んだ地形図をパネルにしました



写真3 アイヌ文化講座「札内で採録されたアイヌ語資料の紹介」

活動ダイアリー

2021年12月～2022年2月の記録

※■は展示活動、■は教育普及活動、■はその他の博物館活動です。

12月1日(水)

■第18回企画テーマ展・令和3年度アイヌ工芸品展「アイヌのくらしー時代・地域・さまざまな姿」を12月12日まで開催。

■「森のちゃれんが50周年フォトコンテスト」2月6日まで募集。同期間の土日に記念ホール・休憩ラウンジを特別開放。

12月4日(土)

■「ちゃれんが古文書クラブ①」を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

■道北巡回展「探してみよう！ 地域のお宝」(美瑛町郷土学館) 開幕。12月30日まで開催。

12月5日(日)

■「森のちゃれんが」50周年記念イベント「映画上映会 アイヌの昔の家を建てるー記録映像の紹介と解説ー」を開催。

担当：藤村久和氏(北海学園大学名誉教授)、小川正人。

12月9日(木)

■令和3年度第1回北海道立総合博物館協議会を開催。

12月11日(土)

■子どもワークショップ「貝の化石で標本をつくろう！」を開催。

担当：圓谷昂史・久保見幸、島誠氏(北広島市エコミュージアムセンター知新の駅)。

12月12日(日)

■特別イベント「近世・近代の日本社会に流通した『アイヌ工芸品』」を開催。

担当：三浦泰之。

12月18日(土)

■総合展示クローズアップ展示、1～5テーマを展示入替。



- ①「松前・江差湊のにぎわい」
②「北海道へ「移住した」古文書たち」
③「久保寺逸彦のアイヌ語辞典」



④「久保寺逸彦が集めた民具」



⑤「木造建物をたてる技術と道具」

⑥「北海道百年」、⑦「ロッペン鳥ってどんな鳥？」

12月19日(日)

■「ちゃれんがワークショップ「博物館で新年祈願！？」日本の画材で絵馬づくり」を開催。

担当：田中祐未・三浦泰之・水島未記。



12月22日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：山際秀紀。

12月25日(土)

■「ちゃれんが古文書クラブ②」を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

1月5日(水)

■森のちゃれんがニュース2021年冬号(Vol. 26)を刊行。

1月9日(日)

■子どもワークショップ「アイヌ音楽 うたって・おどって・ならして」を開催。

担当：スルフ&トノト、甲地利恵。



1月16日(日)

■「アイヌ語講座 文法の基礎①」を開催。担当：遠藤志保・吉川佳見。

1月23日(日)

■子どもワークショップ「博物館のなかで宝さがし」を開催。

担当：舟山直治・池田貴夫。

1月26日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：堀繁久。

1月29日(土)

■連続講座「はじめての古文書講座①」を開催。担当：東俊佑。

1月30日(日)

■特別イベント「博物館のウラ側を見てみよう」を開催。

担当：博物館研究グループ、山際秀紀。

2月2日(水)

■第12回 アイヌ文化巡回展「アイヌ語地名を歩く～山田秀三の地名研究～ 2022幕別」をオープン(会場：幕別町百年記念ホール)。会期、3月7日まで開催。

2月5日(土)

■連続講座「はじめての古文書講座②」を開催。担当：東俊佑。

2月6日(日)

■「アイヌ語講座 文法の基礎②」を開催。担当：遠藤志保・吉川佳見。

2月12日(土)

■連続講座「はじめての古文書講座③」を開催。担当：東俊佑。

2月18日(金)

■総合展示クローズアップ展示1テーマを展示入替。②「新しく仲間入りした歴史資料たち」

2月19日(土)

■第19回企画テーマ展・北海道化石会発足50周年記念展「アンモナイトと生きるー50年の歩みとこれからー」をオープン。会期、5月22日まで開催。

■連続講座「はじめての古文書講座④」を開催。担当：東俊佑。

2月20日(日)

■ミュージアムカレッジ「ハレの日の装い」を開催。担当：亀丸由紀子・尾曲香織。



2月26日(土)

■自然観察会「動物の足跡を探しに行こう！」を開催。

担当：表深太・堀繁久・鈴木あすみ・水島未記、自然ふれあい交流館スタッフ。

■連続講座「はじめての古文書講座⑤」を開催。担当：三浦泰之。



2月27日(日)

■「アイヌ語講座 文法の基礎③」を開催。担当：遠藤志保・吉川佳見。

来館者数

○2021年12月～2022年2月

総合展示室 5,507人 特別展示室 3,965人 はっけん広場 0人

○累計(2015年4月～2022年2月)

総合展示室 592,340人 特別展示室 427,113人 はっけん広場 120,784人

森のちゃれんがニュース 第27号

発行日：2022年3月24日

編集・発行：北海道博物館

〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2

Tel. (011) 898-0456 Fax. (011) 898-2657

ウェブサイト <https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp>

©Hokkaido Museum, 2022